



Data	2024-12
監督・脚本:	曾憲寧 (アナスタシア・ツァン)
出演:	張艾嘉 (シルヴィア・チャン) ／任達華 (サイモン・ヤム) ／蔡思韵 (セリシア・チョイ) ／周漢寧 (ヘニック・チャウ) ／袁富華 (ベン・ユエン) / 麦秋成 (シン・マック) / 郭 爾君 (アルマ・クオック) / 唐浩然 (ジャッキー・トン) ／龔慈恩 (ミミ・クン)

## みどころ

大阪の通天閣のネオンも東京の新宿ゴールデン街のネオンも派手だが、香港のネオンは段違いにド派手！大手企業の巨大なネオン広告や、繁華街で所狭しと路上までせり出しているネオン看板は、世界に誇る「100万ドルの夜景」と共に香港名物だ（った）。ところが、2010年に建築法が改正されると・・・？

ネオンの文字や形は、ガラス管を熱しながら自由自在に曲げることによって作るもの。したがって、一人前のネオンガラス職人になるのは大変だが、1997年にイギリスから返還され、一国二制度が根付いていた香港で、彼らは熟練工として生き延びることができたの？それとも、時代が変われば問答無用とばかりに切り捨てられてしまったの？

「燈火（ネオン）は消えず」とは現実を無視した全くのウソ！現実には、香港の繁華街からネオン看板は撤去されてしまっている。しかるに、なぜ若手女性監督、曾憲寧（アナスタシア・ツァン）は堂々と『燈火（ネオン）は消えず』というタイトルで本作を公開し、主演の張艾嘉（シルヴィア・チャン）は第59回金馬獎最優秀主演女優賞を受賞したの？

本作を鑑賞しながら、しみじみと「人間の営みはネオンと共に！」の思いを噛みしめたい。

## ■楽しかった1997年の香港旅行は、今や夢のまた夢！？■

私の本格的な中国旅行は、大阪で知り合った中国からの留学生の故郷を訪ねる形で2001年に始まった。しかし、実は“あるお誘い”を受けて1997年7月に、返還前の香港を2泊3日で旅行する幸運に恵まれた。費用はすべて招待者持ちの旅行で、何の義務もなしのすべて遊び旅行だから、そりゃ楽しいに決まっている。その上、当時の香港はイギリスか

らの返還直前で、さまざまなイベントが開催されていたから、たつぷりと香港観光を楽しむことができた。

そこで実感したのは、第1に香港の国土の狭さと、それに正比例した高層ビルの林立ぶり。第2は映画『慕情』（55年）でも有名になったビクトリア・ピークから見る100万ドルの夜景の美しさと、繁華街にあるネオンの華やかさだった。大阪では通天閣のネオンが昔から有名だし、東京では、私は新宿ゴールデン街のネオンが妙に印象に残っているが、香港のそれは、大阪や東京とは桁違いの華やかさだった。しかし、本作が製作された2022年当時の香港のネオンは如何に？約25年前の香港旅行で見た、あの華やかなネオンの風景は今や夢のまた夢・・・？

## ■都市計画、景観上、過剰なネオンの可否は？■

私は弁護士として、まちづくり法、都市法をライフワークにしているが、都市法の根幹は「母なる法」と称されている都市計画法だ。他方、2001年に小泉純一郎政権が打ち出した「観光立国宣言」に基づいて、2004年に制定されたのが景観法だが、その狙いと効果は？都市計画のあり方は国によって異なるし、それを巡る法制度も西欧型民主主義国家と一党独裁型中央集権国家によって異なるが、中国（本土）のそれは？そしてまた、「一国二制度」を採用していた香港のそれは？

私は多少はその方面の知識を持っているが、そこで興味深いのは、香港における2010年の建築法の改正だ。これによって、それまで繁華街で所狭しと路上までせり出していた多くのネオン看板は撤去することを余儀なくされたらしい。また、香港の経済的發展の中で、「大きいことは良いことだ」とばかりに、巨大さを追い求めてきた香港の有名企業の巨大な広告ネオンも順次撤去されたらしい。そのことの是非については賛否両論があるはずだが、本作はそれを問う映画ではなく、昔気質のガラスネオンの職人ビル（任達華／サイモン・ヤム）とその妻メイヒョン（張艾嘉／シルヴィア・チャン）を主人公とし、堂々と『燈火（ネオン）は消えず』とタイトルした映画だ。

そんな映画を、なぜ今、若手女性曾憲寧（アナスタシア・ツァン）が監督したの？そしてまた、なぜシルヴィア・チャンが第59回金馬獎最優秀主演女優賞を受賞したの？

## ■なぜネオン工場の鍵が？なぜ弟子が？■

本作はサイモン・ヤムとシルヴィア・チャンの共演が大きな話題を呼んだが、サイモン・ヤム演ずるビルの登場シーンは多くない。なぜなら、本作はビルが死亡した後の物語だからだ。

本作冒頭、ゲームセンターで1人、うまくやるとコインがじゃらじゃらと落ちてくるゲームに取り組むメイヒョンの姿が登場する。いくらカネをつぎ込んでもうまくいかない展開にメイヒョンは怒り狂うばかりだが、そこに影のように現れたビルが、ある願いを念じ、コインを後ろ向きに投げると、アレレ、アレレ、大当たり！大量のコインが景品としてじゃらじゃらと……。なるほど、なるほど……。しかし、これが現実ではなく、メイヒョ

ンの頭の中に浮かんでいる幻想であることは、アナスタシア・ツァン監督の演出を見れば明らかだ。

他方、ビルの遺品を少しずつ整理していたメイヒョンがある日、「ビルのネオン工房」と書かれた鍵を発見したのは現実だ。工房はもう 10 年前に廃業したはずなのに……。不思議に思ったメイヒョンが工房へ行ってみると、そこには見知らぬ青年が寝泊まりしながら仕事をしているからビックリ！彼の名前はレオ（周漢寧／ヘニック・チャウ）。彼は夫の弟子だと言っているが、これは一体ナニ？夫は私に隠れて一体ナニをしていたの？

## ■□■昔のネオンはガラスと熱で如何ようにも！■□■

日本でも観光地を訪れると、陶磁器作りの体験やガラス製品作りの体験をさせてもらえることがある。それは、「観光のあり方」について近時、盛んに言われている「体験型観光」の立派な一例だ。従来の観光旅行は複数の観光地を団体で、バスに乗って、スケジュール通りに見ていくだけのものが多かったが、近時は「体験型観光」を重視するとともに、宿泊日数を増加させることによる高収益化も目指している。

そんな視点で、ビルの弟子だというレオが、ガラス管を火で炙って熱することによって、自由に曲げながらネオンの原形を作っていく作業を見ていると、実に楽しいものだ。なるほど、香港の繁華街にあんなにたくさんあるネオンは、すべて、あんな風にガラス管を熱する手作業によって作られていたわけだ。さらに、本作ラストでは、字幕が流れていく中で、香港ではネオン風の漢字がさまざまに工夫、発明されていたことや、ネオンの巨大化がどんな風に進んでいったのかが解説される。しかもそれは、香港を代表する 7 名の「ネオンアーティスト」たちの名前とその代表作を見せながらの解説だから極めて興味深い。

もっとも、後世に残るようなネオンを作ることができるのは、今は死んでしまったビルのような年季の入ったガラス管ネオン職人だけで、修行期間の短いレオの技術はまだまだ。ましてや、「師匠にはやり残したネオンがある、それを完成させるまでやろう」と説得してくるレオの言葉に乗って（？）、メイヒョンは夫がやり残したネオンを探し出し、完成させることを決意することに。そこから本作の本格的ストーリーが進んでいくわけだが、私の目にはそんなことが簡単にできるとは到底思えない。

そんなメイヒョンに対して、一人娘のチョイホン（蔡思韵／セリシア・チョイ）は現実的だから、「ガラス管ネオン職人に明日がない」と明確に認識していたらしい。そのため、工房の存続とビルのやり残したネオンの完成を巡って、メイヒョンとチョイホン母娘の間には、新たな対立が生まれてくることに……。

## ■□■「妙麗センター」の再生は？ネオンは人間の営みと共に■□■

本作は「死んだ夫がやり残したネオンとは？」という疑問を突きつけられたメイヒョンが、弟子のレオと共にその答えを探し求めながら、自分自身がガラス管ネオン職人になってその再生（製作）に取り組む、というメインストーリーになる。しかし、それは映画としては面白いが、誰がどう考えても不可能なことは明らかだ。すなわち、夫がやり残した

仕事が「妙麗センター」のネオンであることがわかっていても、それは高さ2メートルの巨大なもので、真ん中に「妙麗」の2文字を入れた、複雑極まりない極彩色のネオンだから、メイヒョンとレオの力でモノにすることなど不可能なことは明らかだ。しかも、本作後半には、夫が生存中に連絡を取り合っていた女性、ラウ・ミウライ（龔慈恩／ミミ・クン）が登場してくるから、あわや不倫問題になるのかと心配したが、さにあらず。この女性ミウライも、今は認知症を患っている夫との若き日の記憶を蘇らせるために、何とかビルが作った「妙麗センター」のネオンの再生を願っていたらしい。

しかし、映画は監督の力（脚本）によってどうにでもできる芸術（？）だから、「奥の手」を使えば、メイヒョンとレオの力によって「妙麗センター」のネオンを再生することはもとより、『燈火（ネオン）は消えず』というタイトルを堂々と主張することさえも可能だ。なるほど、なるほど。そう考えると、香港のネオンの偉大さはもとより、「妙麗センター」のネオンの再生を通じて、「ネオンは人間の営みと共に！」という実感をしみじみと・・・。

### ■□■約1ヶ月の大仕事「妙麗センター」のネオンに注目！■□■

本作のパンフレットにあるプロダクションノートには、ネオン撤去映像を記録した貴重な映像として、佐敦（ジョーダン）地区の翠華餐廳（チョイワーチャンティイー／Tsui Wah Restaurant／翠華レストラン）のネオン看板の撤去映像が収録されている。またそれに続いて、約1ヶ月かけた大仕事「妙麗センター」のネオンも収録されている。そして、そこには「映画の終盤で観客の目を奪うのは、メイヒョンやレオが娘たちとともに作り上げた高さ約2メートルの「妙麗センター」のネオンだろう。」と書かれている。下記に転載したこのネオンの作成には約1ヶ月かかったそうだから、本作ではそれをじっくり鑑賞したい。

記



2023（令和5）年2月1日記